黄色なり、周邊花は短くして舌狀部淺く三裂し、中心花は筒狀五淺裂をなす。

(30) **ヤマシロギク** 同上 山地に生する草本にして莖高二三尺、葉は廣き披針形をなし葉柄ありて互生す、緣邊に粗鋸齒あり、形狀普通のヨメナに似て葉質稍硬くして粗糙なり、葉腋より枝を出して分岐し梢頭に頭狀花を着く、形亦たヨメナの花に似たれとも小なり、白色を呈し周圍の舌狀花は稍細長にして先端分裂せす、中心筒狀花は少しく黄色を帶ふ。

(31) **ノダケ**(前胡) 繖形科 山間原野水邊の地に生する草本にして莖高四五尺に達す、葉は羽狀にして下部は全裂上方は深裂をなし葉緣に鋸齒あり、葉質强硬にして粗糙なり、葉柄は膨大して莖を包み、上方に至るに從ひ葉身は小形となり、葉柄のみ大にして所謂苞をなして花梗を擁す、花は莖頂に複繖形花序をなして着生し、暗紫色を呈す、各花細小にして五個の花瓣匕狀をなして内向し、五雄蕊長く突出し葯は裂開して白粉を吐く、尙シロノダケ、ヒメノダケ等あり。

(32) **ツクシゼリ** 同上 山中陽地に生する草本にして莖の高さ二三尺、葉は多く二回に複分裂をなして互生し、葉質柔軟にして深き缺刻あり上部に至るに從つて葉身は次第に小形なれとも葉柄は基部膨大し花の下部に着く、夏季に至り花は莖頂に複繖形花序をなし白色にして細小なり、主として九州の各地に產す。

(33) **ツボクサ** 同上 山間に生する草本にして莖細長く軟弱にして直立せさるもの多し、葉はチドメグサに似て大なり、圓形にして徑一寸内外緣邊鋸齒あり掌狀脈を有す、葉柄は長くして互生せり、花は微小にして葉腋より出つる短梗の頂端に小球狀をなして繖簇せり。

(34) **メカルカヤ**(刈萱) 禾本科 山野に生する草本にして莖の高さ三四尺、秋季に至り毎葉腋に穗を出す、苞葉は大にして長く尖りて褐色を呈し内に穗を擁するの點著し、且各穗の芒は縺れて長く突出せり、此草はオカルカヤと共に通

常カルカヤと稱し、秋の野に普通なるものなれは秋の七草の中に數ふる人あり根は纖細强靭にして採りて刷子を製す。

(35) **オカルカヤ** 同上 前種と共に山野に多きものにして、其の形態も相似たれとも其よりも穗の形其の莖葉共に小にして、苞葉も亦小にして短し。

(36) **スヽキ**(芒) 同上 山野に多き草本なり、莖は長大にして其の質硬く葉鞘も長くして莖を包む、秋に至り叢葉間より莖を抽き高きものは五六尺に達す頂上に長き多岐の花穗を出し、成熟すれは白き絮を生し穗の傾垂して風に靡く樣雅趣あり、此草は又たオバナと稱し七草の一に數へらる。

(37) **ハコネサウ**(石長生) 羊齒類 稍深き山間に生する植物にして、莖は地中に臥して葉を出す、葉の長さ一尺以上にして葉柄は帶褐黑紫色を呈し平滑にして光澤あり細長くして其の質硬し、小葉柄は數回に分岐し小葉を互生す、小葉は楔形をなし次第に廣り前緣に細齒を刻し、其頂端中央部の凹みたる部分は一

個の子囊群を着生す、葉質は厚からずと雖とも强硬にして、葉脈は扇形に列して恰も公孫樹の葉に似たるを以て又たイチヨオシノブの名あり、本草は往年獨乙人之を箱根山に採集して始めて其名を附す。

(38) **イハヤナギシダ** 同上 山間の地往々岩石又たは樹株等に着生するものにして、葉は地下莖の各所より生し、單葉にして狹長披針形をなし通常長七八寸、上下兩端に至るに從て次第に狹くなりて先端鈍く尖れり、革質にして厚けれとも强硬ならす、中脈は眞直にして葉の上面に隆起し、細脈は多く網狀をなして支脈間に介在せり、子囊群は長隋圓狀線形をなして中脈と葉緣の中間に位し皆斜に幷列して近接せり、本草は栃木附近の溪間に生す。

(39) **メヤブソデツ** 同上 稍深き山間に生する植物にして、葉は地下莖より發生し長二尺以上に達し、葉柄は長くして分岐せす淺き一條の溝を有し全面に鱗片を密生す、此鱗片は下部に至るに從て其形漸々大となる、葉身は單羽狀複葉に

して小葉は十個内外あり中軸の兩側に互生し斜に開在せり、葉質は薄き革質にして淡綠色を呈し光澤少く其基脚部は卷縮せる毛を有す、小葉の形狀は長隋圓形にして先端尖り葉緣には細鋸齒あり、且中軸に對する方の緣は鎌狀に灣曲して一の鋭尖突起あり又た往々外緣にも同樣の突起を有するものあり、頂端に在る小葉は常に左右兩突起を有し三裂狀をなす、中脈は明かにして下面隆起し、支脈細脈は表面より明視し難けれとも之を透視するときは明かに其開出して多數の網眼を形成し眼中には葉の基部より葉先に向ふて一條乃至三條の遊離小脈を有し子囊群は此小脈の基部に位するを見る、此の子囊群は各群一個の圓形なる蓋を以て被はれ葉の裏面に碁布し或は往々整列するを見る、本草は栃木附近の溪間に產し、本邦に在りては四國九州の山間に往々之を產すれとも未た其產地廣からさるものなりとす。

(40) **ノキシノブ** (瓦草) 同上 岩石及樹幹等に着生して山地及平野に廣く生ず

るものにして、尙人家の庭園より屋上にも常に之を見る、根莖は强硬にして短し下面よりは根を密生して他物に附着す、葉は單葉にして線形をなし通常長六七寸あり、葉質厚くして革狀をなし葉面滑澤全緣にして、上部は鋭尖となり先端は鈍なり下部も漸次狹細となり葉柄をなす、中脈は分明なれども支脈及細脈は表面に表はれす、子囊群は大なる球點をなし葉の裏面上半部に於て中脈の左右に相隔りて一列に排列せり、又た葉面には小なる黑點を密布せり、其他深山に多く生するミヤマノキシノブは形少しく小にして葉質薄く、葉は地下莖より叢生せずして互に隔りて生し且葉柄長し、ヒメノキシノブは葉矮小にして子囊群の數極めて少し、尙此類に屬する種類は其數多し。

(41) **ミツデウラボシ**(金雞脚) 同上 山地及び平原日陰の地に普通なる植物にして、根莖は稍强し、葉柄は細長くして線狀をなし强固平滑なり、葉は單葉にして深く三裂をなし載狀をなせり、各裂片鋭尖にして末端鈍なり中央片は他の裂

片よりも長し、葉緣は波狀を呈し、葉質は革狀にして厚からす表面は裸出し下面は稍白色を帶ふ、主脈は葉の基部に於て三裂し各裂片に入りて下面に隆起し支脈は分明なれとも細脈は明かならす、子囊群は大にして球狀をなし主脈に並行して其左右一列に點在せり、此植物に於ける葉は三裂せすして二裂或は全く分裂せさるものあり。

(42) **マメヅタ**(螺靂草) 同上 岩上及び樹皮其他石垣等に多く着生匍匐せる植物にして、根莖は細長く所々より分裂せる細根を出して匍匐す、葉は兩樣あり其一は卵圓形をなし豆の形に似て長五六分に過きす、其質厚く多肉にして表面滑澤全緣なり、此葉は子囊を生すること無きを以て裸葉の名あり、他の一は之と大に異なり狹長なる篦形をなし且葉柄長く、子囊群は葉の下面中脈の左右に於て一條をなして密布し、成熟すれは葉の全面を覆ふ此葉を名けて實葉と稱す。

(43) **シユモクシダ** 同上 稍深き山間に生する植物にして、葉の長一尺餘り葉質固からす、葉柄は細長くして全面に渴色の鱗片を密生し、羽狀複葉にして中軸は葉身の基部に於て左右に分岐し各々小葉を互生す、其狀恰もシユモク形に似たるを以て此の名あり、小葉は細長く上方に少しく灣曲し上緣の鋸齒は特に深くして全葉鋸形をなす、子囊群は下面中脈の左右に各一列をなして點布すれとも、下側のものは其數少く或は全く發育せさるものあり。

第三節 地獄及垂玉附近より中岳に至る

(1) **ツリフネサウ**(野鳳仙花) 鳳仙花科 山間濕地に多く生する草本にして莖の高二尺餘、稍紅紫色を帶ふ、葉は長隋圓形にして先端尖り葉緣細鋸齒あり、互生葉なり、夏季に至り梢上に數個の有梗花を着く、花は紅紫色を呈し不整齊にして奇形をなし蕚の一片は甚た大にして距をなし尾端卷回し螺狀をなす、果實

は長形の蒴にして果皮彈力强く裂開の際種を飛ばす。

(2) **アキノタムラサウ**(鼠尾草) 唇形科 山野に普通なる草本にして莖の高さ三四尺、葉は對生にして下部の葉は一回若くは二回羽狀複葉をなし、小葉は披針形にして葉緣粗鋸齒あり、上部の葉は次第に小葉の數を減し遂に單葉となる、花は長き花軸の各節に集まりて開き、唇形にして紫色を呈すれとも淡色又は白色のものあり。

(3) **ホソバノヒメトラノオ** 玄參科 山地に生する草本にして莖の高二尺內外通常枝を分つことなく、葉は對生にして長隋圓形より披針形に移り、先端尖り緣邊に鋸齒あり稍固くして光澤あり、夏秋の候に至り莖頂に長き穗をなして小花を綴る、花鐘狀にして四裂し紫碧色を呈し二雄蕊あり、此種類中には花色極めて淡きものあり。

(4) **オカトラノオ**(珍珠菜) 櫻草科 山地に生する草本にして莖の高二尺以上

に達し、葉は長隋圓形より披針形に至り兩端尖鋭となる、全緣にして葉面平滑なり夏季に至り莖頂に長大なる穗をなし多くの有梗花を綴る、穗は直立せずして通常斜に灣曲す、花は五瓣白色なり、花後球狀の蒴果を穗狀に結ぶ狀著し。

(5) **アケボノサウ** (獐牙菜) 龍膽科 山地に生する草本にして莖高二尺餘り、稍紫赤色を帶ふ、葉は下部に在るものは廣き披針形をなし、上部のものは小なる披針形をなす、對生にして全緣なり、葉脈は三縱道をなす、夏秋の候梢頭及莖頂に枝を分ち有梗花を着く、花は五瓣あり披針形にして外面淡黃緣暈又は淡紅暈あり、內面紫黑色の班點ありて美麗なり。

(6) **トリカブト** 烏頭 (毛茛科) 山中に自生し又は人家に栽培せらるゝ草本にして莖高二三尺、葉は互生して大なり、深く掌狀に分裂しメハジキの葉に似たり、各裂片尙大小の缺刻ある點は菊の葉に似たり、夏秋の候莖頂枝を分ち有梗花を着く花は深き紫色を呈し、萼は大形にして瓣狀をなし不整齊にして奇形を

なし形狀恰も鳥冠に似たるを以て此の名あり、大に注意すべき有毒植物なり。

(7) **シモツケ**（繡線菊）　薔薇科　山地に生する小灌木にして又た多く庭園に栽培せらる、葉は小にして長隋圓狀披針形をなし、先端尖り緣邊に鋭鋸齒あり、葉面粗糙なり春より夏に至り分岐せる稍頭に複繖房狀に小花を攢簇し、紅色淡紅色白色等あり。

第十八圖　アケボノサウ

(8) **ヤマボクチ**　菊科　山中陽地に生する草本にして莖高四五尺に達す、葉は下部に在るものは牛蒡の葉に似て稍小なり、形隋圓にして少く尖り緣邊不正の鋸齒あり或は深き缺刻を有するものあり、上部に在るものは形小にして披針形を

なす何れも上面深綠にして下面は白色を呈す、夏秋の候梢頭及莖頂に大なる長球狀の頭狀花を着く、形アザミに似て更に大なり、此花は始めに花梗屈して斜向し開花時に上直し後に斜向す、全部筒狀花より成り暗紫色を呈す、總苞は强硬にして尖鋭なる剛刺を有し、冠毛は長くして茶褐色を呈す。

第十九圖　ヤマボクチ

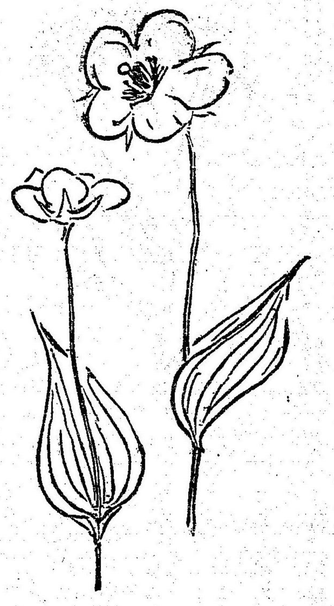
(9) **サハヒヨドリバナ**　同上　山地に生する草本にして莖の高一二尺あり、綠色又は淡紫色を呈す、葉は長楕圓形より披針形に移り葉緣に粗鋸齒あり、葉質稍

硬く粗糙にして莖葉共に微毛あり、秋に至り莖頂枝を分ち細花を攢簇す、總苞は鱗次して數多の筒狀花を擁し鱗片の頭尖れり、花は紅紫色又は白色を呈し二裂せる花柱は細長く花外に突出して散開す、此の類はフデバカマと相似たれども通常其形の小なると葉の三裂せるもの多くして細長く三葉脈は特に大なると香氣少き等は尤も見易き點なりとす。

(10) **ワレモカウ**(地楡) 薔薇科 山地に生する草本にして、莖の高一二尺にして質稍强硬なり葉は互生にして奇數羽狀複葉をなし、小葉は長隋圓形にして質又た强硬に葉緣細鋸齒あり葉背稍白色をなす、秋に至り梢頭及莖頂に微小なる花を綴り紅色にして隋圓形なる穗をなす所大に人の眼を引くの點なり、然れども他の地方に於ては尙花葉の異なるものも少からず、秋の七草に此草を加へて秋の八草と稱せらる。

(11) **ウメバチサウ** 虎耳草科 山中陽地には到る所に多く生し、小草本にして葉

は叢生し葉柄極めて長し、葉形心臟狀をなし全緣にしては葉脈は葉脚より葉先に向ふて並列し恰もコナギの葉に似たり夏秋の候葉間莖を抽くこと五六寸にして枝を分たず、中間に無柄の一葉を着け、其莖頂に一花を開く、白色にして梅花に似たり、假雄蕊は五基をなして開張し、黃色を呈し、其

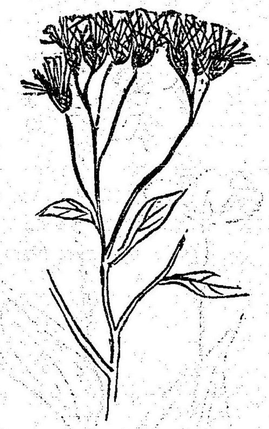


第二十圖 ウメバチ草

間に普通の五雄蕊あり、最も著しき點なりとす。

(12) **タカトウダイ**(大戟) 大戟科 山地及平原に生する草本にして莖の高三四尺に達す葉は長披針形をなして互生し全緣なり、莖頭枝を別ち頂端二葉の間に花

を着く、花は筒狀の總苞中に坐し數個の無被なる雄花あり、其中央より一個の無被なる雌花を生し長く花外に突出し、大戟科に特有なる花の構造を示せり、又た莖を切れは白色乳樣の液を出す、多く夏季に於て開化し秋に至れは莖葉共に黄色に變す。



第廿一圖

(13) **イヌヨモギ**（蒼蘭）　菊科　普通のヨモギに似たれとも葉は稍小にして缺刻淺く、下部の葉は楕圓形にしてヒメヒタギ上部の葉は長楕圓形をなし五尖より三尖に移る其質厚くして粗なり、下面白色にして微毛を密生す、夏秋の候莖の上部に細枝を出し總狀に小球狀の花を綴る其他ヲトコヨモギは葉細長く葉脚に至り。次第に狹くして葉先に於ては尖鋭の缺刻あり、ヒメヨモギは葉細小にして缺刻深く各裂片は極めて狹細に花

又た小なり。

(14) **タムラサウ**　同上　山地に生ずる草本にして莖の高三四尺葉は羽狀に全裂し小葉は長隋披針をなし先端鋭し葉緣には粗鋸齒あり、葉腋枝を出し夏季に至り毎梢頭に大なる一頭狀花を着くることアザミ類に似たり、花形も亦相類す、花は淡紅紫色にして全部筒狀花より成れども、中心花は稍大にして雌雄兩蕊を具へ、周邊花は稍小にして雌雄蕊共に之を缺けるもの多し、總苞は狀に相重なり鱗の尖邊に褐毛あり。

(15) **ヒメヒゴダイ**　同上　山地に生ずる草本にしてタムラサウよりも小にして莖の高二三尺、下部に在る葉は稍大にして廣披針形をなし葉脚に近き所に二三の深き缺刻あり且葉緣には粗淺の鋸齒あり、上部に至るに從て小なる披針形をなし缺刻及鋸齒を有せず、莖枝の上方は數多の枝梢を別ち各頂端に一頭狀花を着く、全部筒狀花より成り淡紫色を呈し、花冠はタムラサウの如く輪開せずして

一側に向ふ、且此の植物の形態中特に著しき點は、鱗狀をなせる總苞の各鱗は其先端更に廣かり圓形花瓣狀をなし花冠と同色をなすにあり。

(16) **アリハヽコ** 同上 山中高燥なる陽地に生育し莖の高一尺内外、莖葉共に強硬にして白色の絨毛を密生し、葉は殆ど平針狀をなして莖の周圍に密生し、葉緣全邊にして反卷せり、莖の上部は數多の長き枝を分ち各梢頭尚分枝して頂端一頭花を着生す總苞は花瓣狀をなし硬くして白色を呈し花後久しく其形態を維持す、恰もカイザイクの花に似たり、内部に在る花は全部筒狀花より成り黄色を呈し極めて小形なり、此植物は概觀ハヽコグサに似たるを以て此名を得たりと雖も各部大に異なれり、本邦所々に之を產しホソバノヤマハヽコと稱す。

(17) **アリノコギリザウ** 同上 前種と同じく陽地に生ずる草本にして莖の高一尺許り、葉は細長くして淺き缺刻ありて恰も鋸の形をなせり依てノコギリザウの名あり、然れども普通のノコギリサウに比すれば各部の形狀稍異なれり、各裂

片多くは鋸齒を有せず、莖頂僅かに枝を分ち頂端に一頭狀花を着く白色若くは淡江色を呈し、周邊には數個の舌狀花あり、中心には筒狀花あり其數多し。

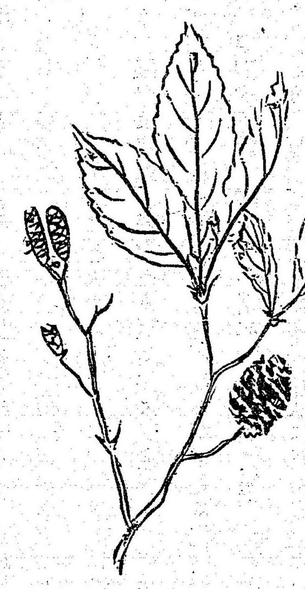
(18) **クサアヂサヰ** 虎耳草科 山陰稍濕氣多き地に生ずる草本にして莖の高二尺餘り、葉は互生なれども對生葉を交ゆ、單葉にして長隋圓形をなし兩端尖銳なり、緣邊には鋭き鋸齒あり莖葉共に微毛あり、夏季に至り梢頭數多の枝を分ちて花を着く、淡紅色を呈し花序の外圍に在る花は大形の萼を有す。

(19) **コアヂサヰ** 同上 小灌木にして葉は對生し隋内形をなし淡綠なり、緣邊細鋸齒あり、夏季莖頭枝を分ち聚繖狀に花を密生す、青色を呈し外圍に在る花の僅かは大形の萼を有せり、或は全く一樣の小花のみより成るものあり。

(20) **アマチヤノキ** 同上 小灌木にして葉は對生し、隋圓形にして葉柄長し、葉面粗糙にして葉莖共に微毛あり、緣邊には粗鋸齒を有す、花は夏季に至り莖頂に聚繖狀に密生し、其の外圍に於けるものは甚大なる萼を有し、花色は始め青色

にして後に至れば紅色に變ず、其の新葉を採り蒸し揉みて乾製し之を甘茶と稱し飲料となす。

(21) **カハラマツバ**（蓬子菜）　茜草科　山地及郊野海濱の陽地に生ずる草本にして莖高二三尺、通常枝を分つことなく、葉は針形にして葉緣は外反し鋸齒を有せず、莖の各節に輪生し通常八個あり、莖頂及上方葉腋に枝を出して花を綴る白晩色は淡黃にして微小なり。四花被あり針狀にして少しく外反せり。



第二十二圖　ヤシヤブシ

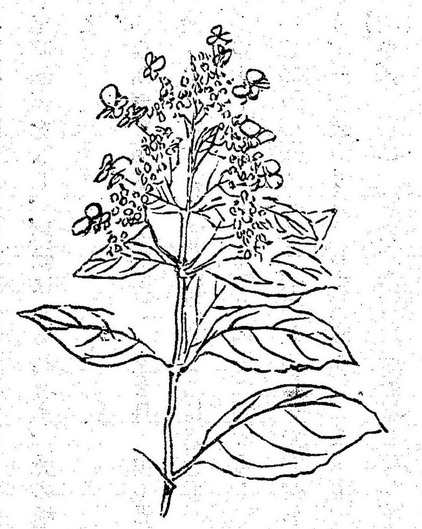
(22) **ヤシヤブシ**　樺木科　山地に生ずる落葉喬木にして、葉は隋圓形をなし、先端尖り葉緣銳齒あり、濶き葉には缺刻あり、葉質强硬にして表面粗糙なり、雌雄同株花にして、雄花は枝の頂にありて長球狀をなし、雌花は枝の下方に在りて隋圓形をなし、强硬にして宿存す、此の植物の樹皮及び果實は之を染料に用ふ。

(23) **シホガマギク**（鹽竈草）　玄參科　山中陽地に生ずる草本にして莖の高三尺餘り、葉は硬くして其面粗糙なり、長隋圓形にして先端尖り、葉緣粗鋸齒あり莖に對生す夏季に至り莖頂及梢上に順次重りて花を開く紅紫色を呈せり、唇形にして彎曲し横に向ひ中部肥大にして先端狹小に恰も烏帽子狀をなして奇形なり、一雌蕊あり長くして柱頭花外に突出す、其他尙淡紫色なるものあり。

(24) **クズ**（葛）　荳科　山野に普通なる蔓生草本にして莖葉共に細毛あり、葉は大にして羽狀に三出し葉柄長し、小葉は圓形又は楕圓形にして先端少しく尖り、葉緣に多少缺刻あり鋸齒を有せず、秋に至り葉腋に總狀をなして花を開く、紫紅

阿蘇山の植物—地獄及垂玉附近より中岳に至る

色にして形狀一般荳科植物の花と異なるとなし、莢果は藤豆の如くにして小に表面毛茸多し、此植物は秋の七草の一に數へらる、又た其の根より澱粉を取り之を葛粉と稱し食料に供す。



第廿三圖 ノリノキ

(25) **ノリノキ**[虎耳草科　山地に生ずる落葉灌木にして、葉は楕圓形をなし先端尖り葉緣は鋭鋸齒あり、葉面平滑にして強し對生なり、夏秋の候に至り梢上及び莖頭に枝を別ちて數多の花を攢簇す、外部に在るものは花瓣狀をなせる大形の萼を有し白色にして美なり、此植物は其莖の內皮を採り製紙の糊料となすものなれば近時之を栽培するに至れり。

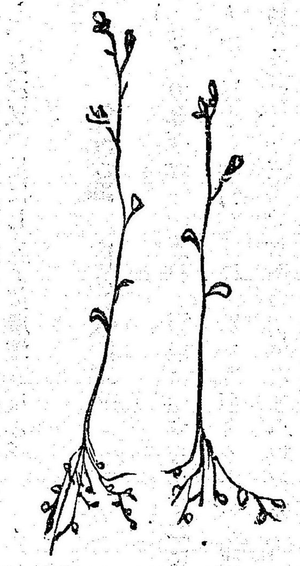
(26) **ツリガネニンジン**（沙參）桔梗科　山地に生ずる草本にして莖の高二三尺、葉は廣披針形をなし葉緣鋸齒あり、葉面稍粗糙にして硬し三四個づゝ莖節に輪生す、春夏の候に至り莖の上方葉腋及梢節に有柄花を開く多くは淡紫色なり、花冠は小形にして鐘狀をなし淺く五裂して下向せり、雌蕊は花柱長く柱頭肥大し、雄蕊又細長にして下部廣濶となる。

第四節　內の牧附近

(1) **ミヽカキグサ**　狸藻科　濕地に生ずる小草本にして、莖は細小にして軟弱なり淺く泥中に匍匐して枝を別ち各節より小なる篦形の葉を出す、夏季に至り花軸を出すこと三四寸數個の黃色なる小花を開く、花後果實を生ず其形圓くして中央に凹みあり耳搔狀をなす、此植物は地下莖の各所に數多の小なる捕虫囊を有し、微小なる動物を捕へて其營養に供するものなれば食虫草の名あり、尙此の

阿蘇山の植物—內の牧附近

他にホザキミ、カキグサあり形狀略前種と同樣なれども、花の紫色を呈するを以て區別し易し。



第廿三圖 ミ、カキクサ

(2) **ヘラオモダカ** 澤瀉科 濕地に生ずる草本にして莖の高二三尺、葉は狹長にして篦形をなし缺刻及鋸齒を有せず、春夏の候に至り花を開く、花軸は分岐し繖狀に花を着け淡紅白色を呈す。

(3) **カタシログサ** (三白草) 三白草科 水邊濕地に生ずる草本にして莖の高二三尺、數條の縱線あり、葉は楕圓形をなし先端尖り全緣なり、數條の葉脈は著しく葉面に凸起せり、上部の數葉は表面に白紋あり、夏季に至り莖頂及葉腋に長き

穗狀をなして花を開く、此の花は花被を有せず雄蕊は開展し葯は圓形にして黃色なること等奇形なり。

(4) **ハクサンフウロ** 牻牛兒科 山地に生する草本にして莖の高二尺餘り、葉は對生し葉柄は極めて短し、掌狀に深く三裂し各裂片は淺き缺刻を有す、莖葉共に微毛ありて稍粗糙なり、葉面には紫黑の斑點あり、春夏の候葉腋枝を出し梢頭及莖頂に花梗相對して花を開く、五萼五辨整齊にして紅色を呈し梅花に似たり、果實は長形にして熟すれば下部より五裂して上方に反開し奇形を呈す。

(5) **スヰラン** 菊科 原野濕地に生する草本にして莖の高一二尺、葉は狹長にして缺刻及鋸齒を有せすして互生なり、夏秋の候葉腋より長き枝を出し梢頭及莖頂に稍大なる一頭狀花を着く、黃色にして全部舌狀花より成りノゲシの花に類し花冠は開張して先端淺く五裂せり。

(6) **リウキンクハ** 毛茛科 濕地に生ずる草本にして莖高一二尺、葉は心臟形を

なし葉緣不正の鋸齒又は波狀をなし葉質柔軟なり、下部の葉は簇生し葉柄極めて長く上部の葉は殆と葉柄を缺く、夏季に至りて梢頭及莖頂に花を開く、花被は七八個あり整齊にして黃色を呈す、花後萼葉果を結ふ形狀ヲダマキの果實に類す、此の一種にエンコウサウあり形狀殆んと似たれとも莖は細長く直立せず、地上に匍匐し擡頭して花を開く。

(7)**シロボノワレモガウ** 薔薇科 形狀ワレモカウに同しく只其の異なる點は莖稍高く伸び葉も亦稍大にして長く、特に花穗は長大にして二三寸に達し白色を呈する等にあり。

(8)**タウオホバコ** 車前科 形狀オホバコと異ならざれとも、葉は長大にして一尺以上に達し、特に花穗の長さ三四尺に達す。

(9)**ツルリンダウ** 龍膽科 山地に生する蔓生草本にして形狀略リンダウに似たり、下部の葉は大にして先端に至りて細長く葉面五縱道あり、葉緣全邊なり上

部の葉は稍小にして三縱道あり、葉腋より枝を出し梢頭三四花を着く花形リンダウよりも小なり、花後紅色球狀の漿果を結ふ。

(10)**ハナカヅラ** 毛茛科 山地に生する蔓生草本にしてトリカブトの一種なり、莖は長き蔓をなし各葉腋より長き花梗を出して數個の濃紫色なる花を開く、其他の形態トリカブトと異なること無し。

阿蘇山の地學的研究 終

阿蘇山の地學的研究附錄

地史大別

本書地質上の時代を記せしと頻々なり今茲に參考の爲に地史大別の一章を附す

吾人の棲息する地球は其始め太陽と共に酷熱なる氣體の一團たりしが、之より分離し漸々冷却して其表面に地殼(チコク)を形成し、漸次中心に向ふて收縮するの力は變して横壓力となり、遂に地殼に無數の皺を生し、之と同時に大氣中に存在せし水蒸氣は凝結して水となりて低所に瀦留し以て海陸の別を生せり、茲に於て大氣と雨水とは交々地殼の表面に作用して、之を霰爛崩壞せしめて谷を穿ち河を造り、之を湖海に運搬し沈澱推積して茲に水成岩を構成せり、尚之に次きて絶へず地球の内部より火成岩の噴出ありて地殼は益々鞏固を加へ、其崩解物は順次水成岩の層を厚からしめ、永き年月の間に於て幾回か此方法を反復して以

て今日の如き復雜極なり無き地殼を構成するに至れり。此の如く順次構成せし水成岩の累層は、其下層に位するものは初成のものにして、上層に至るに從ふて、新生のものたることは疑ふ可からざる事實にして、此の累層の狀態に依り地殼發達の順序を識別することを得るなり、然りと雖とも地殼の發達し來れる永き年月の間には、或は火成岩の噴出地層の褶曲(シウキヨク)、斷層の成生、其他風化水蝕等の如き働力的變異は終始繼續して止まざるものあり、之が爲に或は海底變して陸となり、陸地は陷りて海中に沒するあり、層位は甚しく混亂紛雜を極めたれば、之を以て構成當時の狀態を識別するは容易の業にあらざる可し、故に地質學者は此の地層中に包含する化石を以て地層の新舊を鑑別するの確實なる標準となせり、即化石は該地層構成の當時に生活せし生物の遺體にして、生物進化の系統に從ひ地層發達の經路を明示するものたり、今便宜の爲に地殼發達の時代を左の四代に區別せり。

附錄—地史大別

- (一)始原代
  - 片麻岩紀
  - 結晶片岩紀
- (二)古生代
  - 寒武里亞紀（カンブリアン）
  - 志留里亞紀（シルリアン）
  - 泥盆紀（デボン）
  - 石炭紀（カーボン）
  - 二疊紀（ペルミー）
- (三)中生代
  - 三疊紀
  - 侏羅紀（ジュラ）
  - 白堊紀（クレタ）
- (四)新生代
  - 第三紀
    - 洪積統
    - 沖積統
  - 第四紀

(一)**始原代**　本代の地層は地殼中最古の岩石にして、地層の最下部に位し地盤の基礎を構成せり、其岩石は主として、片麻岩、雲母片岩、石英片岩、角閃片岩、滑石片岩、綠泥片岩、千枚岩、等より成り、結晶質にして多くは層理を呈し剝離性を有す、其中には未た化石を含有するもの無し。

我國に於ける本層の分布は、筑紫海より豐後を經て四國の中央を過き紀伊に入り三河より天龍川に達し、尙飛驒山脈、關東山脈、阿武隈高原等は其主なるものとす、阿蘇山附近に於ては、木葉山附近及綠川中流の沿岸及ひ佐賀關附近等に能く其露出を見る。

(二)**古生代**　本代の地層は主として、硬砂岩、結板岩、硅岩、石灰岩、等の水成岩より成り、特に本代の末期に於ては種々の火成岩の噴出あり、且本代の地層中には數多の化石を包藏せり、然れとも孰れも劣等なる種族にして、動物は兩棲類以下のものにして、歪尾魚類、頭足類、腕足類、海百合類、珊瑚類、有

孔虫類等あり、植物は陰花植物にして、特に羊齒類大繁殖を極めしものは現今石炭となりて殘留し、多量に採掘せらるゝものなれとも、我國土は當時尙海中にありしを以て植物の生育に適せす、故に本代に成れる炭層を有せす、我國に於ける本代の地層は厚層をなして能く發達すれとも化石を存すること少きか爲に悉く外國の古生層と對照することを得す、秩父層及ひ小佛層は之に相當するものなり、最も能く發達せる地方は赤石、關東、北上の諸山脈、飛驒丹波の高原及び紀伊、四國、九州、臺灣等に屢高大なる山地を作りて現出せり、阿蘇附近の地に於ては、肥後の南半より日向に亘り豐後の南部に達する廣大なる面積を占めたり。

(三)中生代 前代の末葉には多くの陸地を構成せし時代なりしを以て、本代の下層は淺海堆積物多く主として、粘板岩、砂岩、礫岩等より成り、上層は深海の岩石白堊の類あるを見るに至れり、火成岩の噴出は前代に比して少きか如し、

然れとも本代の末期に至りて俄かに火山力の大活動を始めしを以て大に火成岩の噴出あり、我國に於ける新期の花崗岩、閃綠岩等は多く此の時代に噴出せり。動物は前代に比して全く其面目を一新し、大に高等の域に進みたり、珊瑚海綿の新種現はれ、又海百合類、海膽類、頭足類は繁榮を極め、前代に於ける歪尾魚類は煙滅して正尾魚類となり、爬虫類兩棲類は驚く可き巨大なる種類にして全盛を極め、鳥類の祖先も本代に於て現出せり、植物は大形の羊齒類に代りて、松柏類、蘇鐵類等の裸子植物となり、尙被子顯花植物も其端緒を開きたり。我國に於ては本代地層の發達は前代に及はされとも、化石は之に反して、豐富にして、地層の區別も稍完全に行はれ、其分布は主として北上山脈、飛彈高原、紀伊、四國、九州、北海道中部等にして、何れも其露出狹小なり、阿蘇山附近に於ては天草全島及ひ葦北八代郡地方、と豐後大野川中流の沿岸等に其露出を見る。

(四)**新生代** 前代末期に於ける火成岩大噴出の餘勢を受けて、其活動力は尙强盛にして諸種の火成岩を噴出し、世界の大山脈は多く此時代に成れり、加ふるに水成岩海底より褶起して大に陸地の廣袤を增加し、從て大陸の地貌及地質構造に著しき變動を與へたれば、氣候帶の區分益々顯著となり、動植物の分布も地方に從ふて大に其形質を異にするに至れり。本代に於ける水成岩は淺海及ひ湖沼に堆積するもの多く主として、砂礫、粘土、砂岩、泥板岩、石灰岩、凝灰岩等にして、火成岩は玄武岩、安山岩、粗面岩の類なり。動物は前代に跋扈せし巨大の爬虫類及ひ頭足類は悉く其跡を斷ち、哺乳類大に其數を增加し特に第三紀の時代に於ては巨大なる種類繁殖せり、象の祖先馬の祖先も此の時代に現出せり、降りて第四紀に至れば哺乳類は愈進化して現今生存するものと其族を同じくし、人類も此の時代に至りて始めて現出せり、植物は隱花植物及ひ裸子植物は大に退歩して、被子植物之に代り大に繁榮の時期に達せり。

第四紀は之を洪積及ひ沖積の二統に別つ、洪積層は稍高隆なる臺地を造り主として、礫、砂、粘土、塵拇土、火山灰等より成り、沖積層は河畔湖邊海濱の最低地を占め主として河流の作用に依り粘土砂等を沈積して成りたる部分なり、此等の地層は地勢概ね平低にして、地味豐饒耕耘に適し交通便利なるか爲に、人類此の所に集合し、國の文華人智の發達は皆此の部分より起るものたり。

阿蘇登山案内

登山の時期 此山は四時登山することを得べし、春は若草もゆる頃より、外輪山の翠巒を眺め、異草珍花を採りつゝ登攀すべし、稍〻春霞多く遠望を妨ぐる憂なきにあらず。夏は山下の温泉に熱と塵とを洗ひ、丘頭山阿又植物採集の好季にして、山頭に達すれば清風颯爽として途中の苦を忘る、時に驟雨の恐なきにあらず。秋は烟飛び雲收まり、天地廓清、千里一望、最も登山の好期なり、加ふ

るに戸下、栃木、垂玉等の山阿紅葉は錦を織るが如く。或は阿蘇神社の幽邃神さびたる樣などは實に絶景なり、又植物の採集にも夏季と殆んど異なることなし。冬は寒氣凜烈にして登山し難しと想像する人あらんも、そは大なる誤謬なり、編者は曾て嚴冬の節、矢津高等師範教授と白雪を踏て、案内者も拉せず、登山せしことあり、寒氣は多少烈しきと雖も、決して恐るゝに足らず、又道路も稍〻白雪なきにあらねど、非常に困難にはあらず、此季は植物の採集に適せず、雷絶巔に豪嘯して、噴烟の雄壯を賞し、巖角を碎きて地質の研鑽には最も可なり。若し山下の温泉に靜養を貪らんと欲せば、夏季を最も可とす、春と秋との農閑の節は、近鄕近在の老幼男女蝟集して、甚だ雜沓す、熊府を去る僅々八九里の地、已に全く炎熱を知らず、避暑地としては實に好適なり、恨むらくは、何れの温泉場も未だ娯樂の機關備はらず、唯入浴と晝眠とを以て滿足とするの外、何の趣味もなし變化もなし、滯在一週間已に徒然に苦しむ、是れ實に欽點なり。

登山路 阿蘇山に登らんには、各地より其の道路あり、されど西熊本市より、東大分町より、東南宮崎縣延岡より、北豊後の日田より登るを重なるものとす、今之を左に述ぶべし。

第一 熊本市より 熊本市の東北端、立田口より、馬車、人力車の便ありて、道路坦々行くこと五里、大津町に達す、此の間、道の兩側には老杉森々として天を磨し賴山陽が左の詩は實に實況なり。(熊本大津間は近々輕便鐵道通せんとす。)

大道平々砥不レ如。熊城東去總青蕪。老杉夾レ路無二他樹一。缺處時々見二阿蘇一。

是より舊道を左に取らば二重峠に達すべし、尙平夷なる新道を進み、甚しく足勞を感せず、平野は漸次縮りて遂に兩山近く相對し、白河の亂流は雷の如く、大小の岩塊は河床に落磊たり、是れ即ち立野にして(所謂立野の火口瀨)道路分れて二となる、左道は大分往還にして登山の道あれども、先づ右道を取るべし。

(熊本市より茲まで七里二十二町馬車賃五拾參錢、人力車賃壹圓五拾錢許)

立野より十二三町白河と黒川との合流點に戸下の温泉場あり、若し疲勞せば玆に宿するも可なり、旅館には紅葉館、長陽館、柳屋等あり、（宿料は一泊五十錢内外）此地より半里弱にして、栃木温泉場あり、旅館の重なるものは谿香館、積翠館等なり、戸下及び栃木よりは案内者を傭ふべし、（案内賃八十錢許り）此の所より登山路に又二條あり、湯谷道、地獄道是れなり。

（イ）湯谷道　栃木の近傍より左徑に入り、傾斜甚だ急ならざれど、悉く登り坂にして、戸下より二里許にして湯谷に達す、温泉あり、水蒸氣の勃々とし噴出せるを見る、地は二千六百尺の高所を見る如く、西望立野火口瀦の間より熊本平野を一望に收め、宛然一幅の『ぱのらま』を見る如く、眺望絶佳なり、是より坂路急峻、登ること十七八町にして廣濶なる平地所謂烏帽子岳の千里濱に達す、東方に中岳の雲烟勃々たるを望む、是より一里許中岳の麓、阿蘇山上神社の邊に達す、其傍に茶亭あり、酒、菓子、卵等を鬻ぐ、即ち噴口火は近く頭上にあり、少憩して登る

七八町にして、頂上に達すべし、此路の最も急なるは湯谷及び千里濱の間なり。

（ロ）地獄路　栃木より一里半許の長野村まで馬車を通ず、是より左小徑に入り、稍々坂路にして、垂玉温泉に達す、（栃木垂玉間二里弱）地は爆烈火口の底にあり、是より二三町許にして、地獄温泉なり、夜峰の北麓にありて、今尚噴出せる火口あり、地獄より道路は漸次急となり、御竈門、烏帽子岳の間を通じ、或は登り或は降り、辛ふじて中岳の出小屋に達す、（地獄よりは路甚だ迷ひ易し、是非案内者の必要あり、）地獄より此地まで二里なり、玆にて湯谷道と合す地獄、湯谷の兩道路は湯谷路稍々近くして登るにも困難少し。

（ハ）湯谷路　立野より大分往還を進めは、有名なる數鹿流瀧あり（瀧は路下にあり）瀧の稍上方七八町の所より、右折、湯谷を經て登る、坂路甚だ急ならず、湯谷よりは戸下よりのイ道と同一なり、（數鹿流の上より湯谷まで道程一里半許）

（ニ）坊中路　大分往還を立野より東すれば、三里廿八町にして、坊中に達す、

是れより右折登山すべし、同じく坂路なれども、甚だ急ならず、登ること一里半許にして、烏帽子岳中岳の間にて湯谷道に合す、(坊中より中岳の阿蘇神社の邊まで六十五町と云ふ)坊中にて案內者を傭ふべし、賃錢六十七錢なり。

第二　大分町より、大分町より馬車人力車の便ありて西行十一里十町にして竹田町に達す、稍繁華の一驛なり、尙馬車を利用すべしと雖も、山間を通ずるを以て嶮惡なり、五里十五町にして、笹倉(サヽクラ)に達す、是より阿蘇外輪山の裾野にして、道路平坦瓜先上りとなり、所謂波野原(ナミノガハラ)を通じ、全く登り極りて瀧室峠(タキムロトーゲ)に達す、即ち外輪山の頂點なり、是れより急坂を下り坂梨に達す、全く火口原內に入れり、坂梨の西半里許にして宮地(ミヤガ)町なり、(笹倉宮地間二里十町)有名なる阿蘇神社あるを以て參詣すべし、旅館には蘇門館(ソモンクワン)、芳野屋(ヨシノヤ)、丸屋(マルヤ)等あり、宮地より一里二町にして坊中に達す、是より左折して登攀すべし、其路筋は第一の(二)坊中路を見るべし。

第三　延岡より　延岡より登るには、西行六里十町にして、瀧下に達す、尙進むこと八里二十一町にして、三田井(ミタイ)に至る、有名なる神代の傳說地、高知穗の古跡は此の附近にあり、尙山又山の道路を踰へ、六里二十九町にして肥後國馬見原(マミワラ)町に達す、是より大分縣の河內を經て、肥後國阿蘇郡に入り即ち高森町に達す、(三田井高森間十一里二丁馬車の便あり此の地は阿蘇山の麓にして一泊して案內者を傭ふべし、これより登山するには、色見(シキミ)村を經て登るを最もよき道とす、高森より北行十四五町にして、左右に分る、右道は豊後竹田町及び阿蘇郡宮地町に通ず、左道を取り、行く二十五六町にして色見に達す、或は鬱蒼たる森林を通じ、道は漸次高原となり、苅萱茅萱茂り合ひ、進で山の神峯(ヤヽヂ)と云ふ所に至れば、風景絕佳にして、南部火口原の東部全體を一望に收む、是より路愈々急となり或は登り或は降り、牛鬼ヶ谷と云へる深溪の邊に達す、是より草木生せず、火山砂彈の磊塊たる間を進み、右に小高き皿山と云へる裾を進み、

千里濱に達す、即中岳の火口原にして、噴火口近きにあり。

第四 日田より 福岡縣中津町より、耶馬溪を見て、登山せんとする人の爲めに、一路を記せば、中津町より六里十五町にして柿坂に達す、地は既に耶馬溪絶景中の一驛なり、尙南行七里十三町にして日田町に達す、繁華の一都邑にして、宿泊も自由なり、是より道路は嶮惡にして、馬車を通せず、唯馬背によるべし、日田より九里九町にして、肥後國阿蘇郡北小國の宮原に達す、已に阿蘇外輪山の裾野なり、此地より漸く馬車の便ありて外輪山の絶頂なる遠目鼻を踏へ、六里三十町にして火口原内の内牧町に達す、温泉あり、養神館、龜屋、菊島屋等の旅館あり、戸毎に温泉を有し、一浴數日の勞を慰すべし、内牧より坊中まで一里半にして、直に中岳の火口に向ふべし、是より熊本市よりの坊中路によるべし。

名勝

阿蘇神社 宮地町にあり、官幣中社にして、古書に閼宗神宮に作る、祭神は健磐龍命に、阿蘇比咩、國造神を配祀し、阿蘇三社と號す。

健磐龍命は神八井耳命の子なりとの說あれども、阿蘇大宮司家の系圖に神武帝より七代の孫とせり、(神八井耳命は神武帝の御子なれば、前說と阿蘇家の系圖とは四代の差あり、何れが信なるを知らず。) 阿蘇系圖に健磐龍命は、阿蘇の草部吉見命の女(阿蘇比咩)を娶り、速瓶玉命を生むと爲す、日本書紀の景行紀に『時有二神、曰二阿蘇都彥阿蘇都媛、忽化人以遊』とあるも、こは健磐龍命夫妻の現れたまへるなり、相傳ふ此時景行帝速瓶玉命の子惟人に仰せ、宮地村に神宮を建てさせ玉ふ、即ち大宮司の初なり、(編者曰く景行帝は神武帝より十二代にまします、此時健磐龍命現はれ玉ふによれば阿蘇家系圖の七代說を可とするか、)

一宮記によれば、阿蘇大明神は本州の一宮にして、中古より鎭座の數增加して十二社と稱ふ、第一は健磐龍命、(日本紀略に炎旱之時祈、即降雨、護國救民、

靡レ不レ賴レ之とあり）第二阿蘇比神、（健磐龍命の夫人なり）第三國龍明神、（南宮と稱し摧宮司家の祖先、即草部吉見命にして阿蘇比咩の父）第四比咩御子明神、（北宮と稱し健磐龍命の女）第五彦御子明神、（國造速瓶玉命の子即惟人にして大宮司家の祖）第六若比咩明神、（彦御子明神の妃）第七新彦明神、（草部吉見の弟）第八新比咩明神、（新彦命の嫡女）第九若彦明神、（若彦命の嫡子にして北宮の祝山部氏の祖）第十彌比咩明神、（若彦明神の妃）第十一國造明神、（別殿にして三宮と云ふ速瓶玉命）第十二金礫明神（別殿にまします綏靖天皇なり）これなり。

幾千代の春や薫りし花さくら梢もふりぬ阿蘇の神垣　大宮司友隆

まもれなを名たゝる阿蘇の宮柱ふとしき立し神の誓ひに　友隆　妻女

阿蘇家傳（大宮司惟馨天明文化の撰）に云、神功皇后韓國を討給ひし時も、大神の御靈現はれて、御力を併せ服從させ、其の荒御魂は健軍社（飽託郡の東部にあり）鎮まましまして、永く夷賊を禦ぎ給へり、阿蘇宮の東に向るは皇朝を護りませるにて、健軍社の西に向るは皇朝を防き座るなり、速瓶玉命は大神の第一の御子にして、父大神と共に國土を經營して、北宮に鎮り座り、乃ち雨宮神を娶て、彦御子神、高橋神、日宮神を生み給へり、彦御子神は即惟人命にして、又八井耳玉命と申す、南嶺の主神にて本宮の五宮に座り、新羅征討の時御祖神等（御祖神は母神の御事なり）と共に、御軍に仕奉りて、彦御子神は甲佐社（上益城郡甲佐町）に鎮り、御祖神は郡浦（宇土郡郡浦）に鎮り座て、共に夷狄を防ぎ給ふ。（阿蘇惟敬氏は曰く、健軍社は健緒組命を祀ると。前文には大神の荒御魂を、健軍社に祭ると記せしも、尚ほ一説として記す。）

本社及び阿蘇大宮司家には、幾多の寶物、古文書等あり、古考家、歴史家、美術家の參考となるもの尠からず、請ふて拜觀を得ば稗益する所多かるべし。

阿蘇家の由緒　阿蘇氏は我が國に於ける無二の舊家にして、神武天皇第二の皇子、神八井耳命の孫、速瓶玉命の後なり、崇神天皇の朝、速瓶玉命阿蘇の國造に封せられ、遠く九州に下向あり、即ち山賊を征し、猛獸を平げ、農を敎へ、耕を勸め、健緒組命（飽託郡健軍社）及び吉見神（阿蘇郡吉見社）と共に專ら皇威の普及と人民撫育とに力を盡くされしは下野狩が今日の所謂練兵にして、祭式が農事の模形なるに就てもトせらるべし、かくて惟人命甲佐社は母君、蒲池姫郡浦社と共に神功皇后の三

韓征伐に從事せられしことは、今日兩社の祭典式に殘れり、かくて世々阿蘇の國造として祭政を世襲し來りしが、大化の革新に國造は悉く郡司となり、阿蘇氏も亦阿蘇益城の評督に任ぜられ、傍ら大宮司或は神主として、根漸次其據を固くせり、此の頃阿蘇、健軍（タケミヤ）、甲佐（コーサ）、郡浦（コーノウラ）、を四箇社といひ、其神領五郡に亘り、八千町に上りしかば、其勢力も亦大なりき、彼の謠曲高砂にある友成も亦本宗の人にして、位階承叙の御禮に上京せし折、彼地に立寄りしことが傳說として殘りしものなり、しかも源氏勃興の節は、安德天皇を隱遷しまつりしかば、源氏の怒を買ひ、多く所領を失ひぬ、建久四年頼朝使を遣して古來相傳の下野狩の式法を問ふ、かくて此頃よりして一族威を震ひて本宗漸く衰へ、加ふるに北條氏阿蘇を領し、遠江守隨時、小國（チグニ）に住し、遂に阿蘇の氏姓を稱するに至り、阿蘇氏の所領は漸く上益城郡の數拾邑に過ぎざるに至りぬ、弘安蒙古襲來の時は、惟景出征して功あり、有名なる竹崎季長も亦阿蘇氏の支族なり、元弘三年

惟時、惟直父子後醍醐帝の綸旨を奉じ、菊池寂阿と共に北條英時の九州探題館を襲て克たず、寂阿は戰死し、惟直は武重と共に阿蘇に走り、又日向國鞍岡（くらをか）に遁れ、兩城共に陷りて山中に隱れたり、惟時は上京して足利高氏に從ひ、六波羅を攻めて功あり、勅して阿蘇全部及び四ヶ社領を賜はる、建武二年尊氏叛きし時は、新田義貞に從ひ函根竹下（ハコネタケノシタ）に戰ひ、延元五年尊氏西上闕を犯す、天皇延曆寺に幸し給ふ、惟時神璽を奉じて、東坂本彼岸所に入れ奉る功により、豐后の日田郡の地頭職及び薩摩國守護職に補せられ、六ヶ所の地頭職を賜ふ、同年尊氏西下の節、惟直は筑前多々良濱に戰ふて克たず、肥前小城（をぎ）山に自刄す、是より惟時、惟澄、惟武、惟政、惟兼は相續て南朝勤王の士なり、惟澄の子惟村北朝に降りてより、阿蘇家二分して南北兩朝に事へ相爭ひ、南北兩朝御媾和の後に至りて漸く合一す。惟豐の時に至り、甲斐宗運を用ゐて領地を恢復し、殆んど肥後半國三十五萬石を領しぬ、惟豐又勤王の志深く、金品を献して後奈良

天皇御即位の費用及び紫震殿御營繕費を奉る、天皇勅使烏丸光康を矢部に下し給ひて、震翰及び松風の香爐を賜ひ、從二位に叙せらる、惟豐の子惟種を經て惟光に至る、年僅に三歲、甲斐宗運歿して將士危懼の念盛なり、島津氏大舉來り犯す、將士鬪志なく、阿蘇氏の二十四城悉く陷り、將士多く陳歿す、惟光弟惟善と共に坂梨惟連等四五の人に扶けられて矢部目丸山中に遁る、已にして豐臣秀吉西下島津氏を征す、惟光時に歲漸く五歲詣る能はざるを以て、家領悉く沒せらる、祖母之を嘆き侍女小宰相を小倉に遣り、秀吉に訴ふ、秀吉之を憐み、矢部三百丁の地を與ふ。かくて佐々成政肥後を領し、惟光兄弟を熊本に招き、厚く之を遇す、成政自刄の後、加藤清正小西行長肥后半國宛を賜はり、惟光は清正に惟善は行長に托して厚遇せられしも、文祿征韓の役中、葦北に賊徒あり、相良氏の臣、其主義陽の惟豐に殺されしを含みて、大閤に讒して阿蘇氏の敎唆に出づと稱す、秀吉怒り惟光を花岡山に自刄せしむ、惟善遁れて又矢部に走る、

惟光時に年十二歲、加藤氏其冤を憐み、惟善を遇し、神社を復舊して、大宮司に補す、細川公に至りて漸く厚遇せらるゝに至りぬ、是よりして阿蘇氏は其所領を失ひ、單に大宮司として神事一方を司どり、肥后神職を支配し、位階は三位四位の間にありて、隔年上洛して、皇室の眷顧を蒙る、內にありては專ら文學に志し殊に友隆、眞輯を經て惟典に至り、高本紫溟を聘して家塾を開き、又小澤盧庵を師として和歌を學ぶ、其子惟馨亦國學者として名あり、父子の著述數十部に上り、子惟治漢學殊に陽明學に精しく、陽明學を以て神道を說きし著述等あり、惟治勤王の志深く、四方の士と交通し、又屢々上京して畫策する所あり、殊に文久二年上京して應司公によりて、攘夷の行ふべからざるを極言す、言行はれざりしも、深く建言の趣旨を賞せられ、公卿間參入をゆるされて、御卷絹一卷を賜はる、其の子惟敦又文學を好み、著書數部あり、今の男爵惟孝は其の嫡子なり。今同家に傳はる數多の寶器の內、重なるもの數點を擧ぐれば左の如し、

附錄—名勝

一、古文書　平安朝及び鎌倉時代より南北朝の綸旨、令旨等百五十通餘。

一、蟻丸太刀　長三尺三寸五分、幅一寸三分（銘曰永仁五年三月一日（皇紀一九五七年）來國俊作）

一、蜀江錦　明太祖より征西將軍に奉りしものを阿蘇家に賜ひしと、長一間半、横一間

一、南朝古鎧　貳領　一、雷切丸　一振

一、下野狩繪掛物　六幅　（此の一章は阿蘇惟敬氏の記述にかゝる）

小嵐山　宮地町の北方半里ばかりの處、外輪山の内壁僅に小丘をなせる者なり。老松頂を掩ひ鹿漬川その麓を洗ふ、土橋あり櫻樹あり其の景趣宛として洛西嵯峨野の勝地嵐山の小模型をなす。小丘の頂靜かに耳を任かすれば、松の音と水の聲との人の世にあらぬ調べをきくべく、老松の隙遠く南を仰げば、今は里と田となれる火口原のかなた、紫淡き阿蘇の五岳をのぞむべし、若しそれ僞り知らぬ農夫を近景に、山の噴煙を遠景にするの情趣に至りては、或はこれ都人の誇るなる嵐山も尙及ばざる處ならむか、櫻の春、水の夏、清興を掬むの人少からず。

實に蘇峽の勝地たり、丘に碑あり。

月花にあはれ嵯峨野の面影をうつすやこゝの小嵐の山

と刻す。阿蘇惟治氏の筆なり。（得能叢記す）

北宮　宮地町の北一里餘。古城村字手野にあり、祭神四座にして第一國造大明神（速瓶玉命）第二火宮大明神、第三高橋大明神（二宮三宮ともに速瓶玉の御子）、第四雨宮大明神（速瓶玉命の夫人にして火宮、高橋宮の母神なりと）社内に陰陽二株の大杉樹あり森々として天を磨し、凡九百年以前の古木なりと云ふ。

あまぬくも代々をてらして北の宮速瓶玉の神のひかりは　大宮司友隆

あとたれしゝるしを今も瑞籬の代々をひかふるめおの神杉　泰勝寺性天

西巖殿寺　黑川村字坊中にあり、草創は聖武天皇の御宇唐人最榮讀師なりと云ひ又は近衛天皇の天養元年大宮司友孝の下知により最榮讀師佛堂を建て十一面觀世音を安置し西巖殿寺と稱したりと云ひ、其の何れが眞なるを詳にせず。元と

本堂は阿蘇山上にあり(現今中岳と烏帽子岳との間に古坊中と云ふ所あり)天正年間兵火に罹り、慶長年中加藤清正の肥後に封せらるゝに及び再建せられ、維新の際更に山の北麓坊中に移されたるもの即ち現今の西巖殿寺本堂これなり。奥行八十一尺間口三十尺。東西平家造なり。細川宣紀公の題額あり壽安殿と云ふ。此寺は細川公より維新に至るまで年々五百石を賜はりたり。今山上に存するものは、明治二十三年三月十七日富岡縣令の許可を得て建築せるものとす。此の附近を坊中と云ふは、その當時町の四方に山上本堂に勤むべき僧侶數多住居し彼等の住宅は所謂坊にして、其の坊三十六ありたり、一坊毎に名稱あり、學頭坊、成滿院、大寶院、等の如き是れなり、現今僧の住める一茅屋は舊學頭坊の跡なり、斯く坊多くして之に僧侶住居し、遂に此地を坊中と稱するに至る。

下野狩場の舊跡　杵島岳の西麓、長陽村大字長野にあり、往古健磐龍命の常に遊獵の地にして、命薨じ玉ひて阿蘇宮に鎮座の后は御遺旨によりて、阿蘇鷹山下野の三の馬場にて、毎年二月卯の日、大宮司及び神宮權大宮司等の宮人、各々風折烏帽子狩衣に夏毛の行縢を佩き、腰に幣帛を指し、白木の弓、白羽の箭を以て、猪鹿を射取り、神前に供え、魚鳥は阿蘇神社神領の地所々(魚は郡浦、八代、鳥は矢部、砥用、南郷、小國、猪鹿は下野の狩にて)より之を供す、此の狩には種々の儀式あり、其人數も三千五百人に及び、古代の犬追物及び騎射の如き、習範を茲に取りしものなり、建久四年源右大將頼朝、富士野に狩す、使を遣して古來相傳の下野狩の式法を問ふ、下田權大宮司をして、其禮を傳へ、鏑矢百本と行縢とを製して右大將に呈す。(光永家傳には當時光永某亦使命を奉じ鎌倉に赴く、右大將賞して本國津守莊を賜ふと、未だ眞僞を詳にせず)。右大將賞して太刀一口を賜はると云ふ。

小男鹿のふすいの床を追たてゝかりをしものにはなつ矢さけび　觀音寺市山

久具牟田　永水村大字無田にあり、一大沼澤にして長五百七十間横四百間許あ

り、折戸沼又は常鶴の沼とも云ふ俗に千町牟田と云ふ即往古此の附近に一大湖水ありし其の遺趾なり、蘇溪温故に曰く、千町牟田は狩尾村東の沼原なり、靈鶴四季共に此地に栖めり、故に常鶴の沼と名く、又くゝと云ふ草を生ず、此草農具に用ゆれども猥りに採ることを禁ず、八月朔の夜、近郷の農夫數百人松明を照して、くゝを引く、之を俗に蘇溪の龍燈といふ。又曾て細川宣紀公の時、御庭の養鶴を此沼に放ち給ふ詩あり。放汝阿曾山下田、翺翔披霧好還天、蓬萊萬里莫勞翼、直到仙鄉歷幾年。

●●●鹿流瀧 立野村の上にあり、大分往還より右小徑を下り、數歩にして瀑上に至るべし、黑川の末流茲に至り轟然として落下し、一大瀑布を懸く、高さ十九丈八尺幅十五間實に肥後國第一の大瀑と稱す、老樹鬱蒼、怪巖削立、水煙朦朧として昇り、萬雷の一時に轟くかと疑はる、實に山道の一美觀にして、往來の人の嘆賞する所なり。

老の身の腰を立野にやすらひて杖にすがるの瀧を見るかな　讀人不知

昔、阿蘇明神、阿蘇南北二鄉の窪地に水の湛えしを涸さんとて、二重峠を蹴破りたまふ、彼山二重にして崩れず、明神更に須輕の山を蹴て之を破り、阿蘇の山中是より沼地涸れたりと、此の時數多の鹿流れ落ちしかば、數鹿流瀧と名くと、俗說取るに足らざれども、阿蘇谷、南鄉谷が往時溺水たりしこと、數鹿流の瀧の下より鈌潰して、黑川と白河と漲溢せしことは間違なし。(火口原の部を見よ)

●●●白糸の瀧 數鹿流瀧と相並びて小瀑あり、宛然一條の白練を懸けたるが如し、彼は雄壯にして、是は幽美なり、恰も雄瀧と雌瀧と相並びたるの觀ありて、對照甚だ妙なり、此の瀧は一に銅提瀧と云ふ。

●●●鮎返瀧 栃木温泉の南方にあり、白川の末流瀨で一大白練を懸く、數鹿流瀧ほど大ならざれども、瀧壺の附近より眺望すれば、甚だ雄觀なり、殊に秋深けて

兩岸綿の紅葉を綴り、清潭に映ずるの景は、實に佳なり。

蘇山餘情

蘇山及び山下の名勝古蹟を咏じたる詩歌尠からず、已に多少本文に記入せしかども尚旅行家及び登攀者の徒然草に重なるものを左に錄すべし。

阿蘇山　　阿蘇惟敦

朝夕の雲のゆきゝにおり〳〵の
　　麥をかゆる阿蘇の神山

同　　同

春かすみたちもおよばす大空に
　　ひとり寒けき阿蘇の神山

同　　藻鹽草

衣だにふたつありせば赤はだの
　　山にひとつはかさましものを

同　　高見廣川

仰ぎみて麥かしこし今もかも
　　たけいはたつの神やますらむ

同　　顯仲(夫木集)

紅葉する赤膚山を秋ゆけば
　　下てるはかりにしきおりつゝ

下野　　阿蘇惟敦

わけてゆく下野の原の露はみな
　　むかしをこふる涙なりけり

阿蘇山中　　阿蘇惟敦

附　錄—蘇山餘

ましらなく阿蘇山下の小徑路
　月にぬれつゝ歸る柴人　　長野一誠

阿蘇山の鳴動
あそがねのどよむを聞て旅人は
　雲なき空にいぶかりやせん

北白河宮富子妃殿下

温泉釣樋（戸下八景の一）
引わくるいてゆのかけひ諸人の
　やまひのたねをなかしはつらむ

長尾殘月（同）
起いでゝむかふもさびし秋の夜の
　長尾にのこる有明の月

同

日暮瀑布（同）
つれ〴〵のなぐさめづまと見つるかな
　ひとすじ落つる日ぐらしの瀧

北向紅葉（同）
染つくす北向山のもみぢ葉に
　戸下の庵もてりまさりつゝ　　高見廣川

巖下往來（同）
旅人も心してゆけおり〳〵は
　礫くずるゝいはのかけ道　　中路明愛

温泉釣樋（同）
阿蘇山の岩根の釣樋たえ間なく
　谷の戸下にいでゆ落ち來る　　日高實容

附　錄—蘇山餘情

附　錄—蘇山餘情

鑑橋晨霜（同）　木下嘉一

黒川のながれの上を今朝みれは
　眞白くかゝる霜の石橋

長尾殘月（同）　宇野東風

夜もあけし戸下のみ湯に影見えて
　殘る長尾の山のはの月

日暮瀑布（同）　村井直門

名にしおふ瀧のしらなみ日ぐらしに
　見れどもあかぬ瀧の白浪

立野夕照（同）　松井通昭

谷ふかき戸下は早くかけくれて
　殘る夕日や立野なるらむ

兩川激流（同）　長野一誠

白川にまた黒川のおちあひて
　岩うつ浪のおとのはけしき

宇佐使にて下りける時あそのの社にまうで丶　基長

いまはとてしものはふりこいとまあれや
　あそのみ山の雪もつもれる

阿蘇に參る月の供助とは我事也　三千風

高砂のゆかりや松の下納涼　支考

阿蘇長烟　佐藤安節

非レ霧非レ雲山似レ蒸。長烟一片自層々。神池本有二寶珠在一。千古猶疑瑞氣昇。

賦二阿蘇山一　安藤元簡

巍然突起壽安山。造化鍾レ神跨二海寰一。龍德古今長自若。能敎二雲雨滿二人間一。

附　錄—蘇山餘情

附錄—蘇山餘情

上阿蘇山

鉄石　生田清範

採レ藥那邊且訪レ仙。西遊火國憶二當年一。九州諸嶺起從レ此。萬丈層煙飛向レ天。
山麓成レ湖痕尙在。桑田變海事空傳。回レ頭身已脫二塵界一。更浴二溫泉一心爽然。

阿蘇山

東船山

舊坑唯有二渟泓永一。時看盤渦躍二怒龍一。冷滔空中方作レ雨。劫灰池底別成レ峰。
(坑中灰土積爲二峰勢一)溪聲不レ聽瀾翻舌(周圍一里不レ聽二溪聲一)山勢仍開磊塊胸(山皆赤禿如レ開レ巒)造化疑成新
世界。洪爐一氣久陶鎔。

觀山亭(長野大人下居月下名觀山亭々有二鰹舟觀書樂三字額一)

克堂　佐々友房

屋上青巒屋下泉。主翁淸福有二前緣一。觀山亭裡讀書樂。領得阿蘇風月權。

過二坂梨嶺一望二阿蘇山一

賴山陽

路繞二阿蘇腰一不レ見二阿蘇首一。今朝雨霽雲又開。日照二三峰一覩二皺皺一。一峰
尊嚴是丈人。一峰肩隨在二其右一。別有二一峰一似二鋸牙一。竦立其左一爭二雄秀一。

粲然要レ我爲二快觀一。唯恨一笑輙背走。岐路高低頻回看。髣髴出沒猶在レ後。

阿蘇山首尾吟

佐藤安節

曾記壽安鎭國山。維神所レ托隔二塵寰一。寒溪噴レ火石猶裂。甘雨降レ膏雲
不レ頑。烟染二嵐光一生二雲外一。嶺分二空翠一秀二林間一。英靈如レ在禱而驗。曾
記壽安鎭國山。

登二蘇山一作

長球陽

蘇山何屹崒。其嶺衝二碧霄一。欲レ攀二層峰凸一。先渡二深溪凹一。寧借二祖龍手一。
山已半赭顏。稜々懸巖尖レ於レ劍。行雲當レ之裂有レ聲。神威太赫々。拜來
心肅而。天風吹不レ斷。靈烟無二歇時一。恠石欲レ躍如二龍虎一。吾非二飛將一爾
何怒。浩然振レ衣跨二虎頭一。長嘯聲冷萬山秋。

阿蘇山

阿蘇惟敦

天下名山三十六。其一是我關崇山(あそさん)。山勢凌レ雲三萬尺。斷崖絕壁不レ易レ攀。

池湛二五彩一映二紅日一。烟飛二霹靂一氣凜冽。神造鬼沒幾層々。回顧衆山如二蟻蛭一。君不レ見將軍彼何人。屈二膝西土一稱二外臣一。此山不レ受鎮國號。威靈赫々千古新。

登二阿蘇山一　清藤秋窓

五峰突兀聳二半天一。天風浩々吹二醉顏一。吾來振レ衣最高頂。下瞰靈池列二仙班一。氣象萬千多二變態一。造化妙機鍾二此間一。硫氣蒸レ空散爲レ雨。慕地洞口失二來路一。晴天雷在二地中一鳴。坤軸震撼神靈怒。極目莽蒼亂二雲橫一。滿山樹木慘不レ生。聞說舊坑之大跨二三國一。不レ負世界第一名。

望二阿蘇一池煙一用二水斯立韵一　秋山玉山

阿蘇之山何奇絕。青壁削レ瓜崖削レ鍔。伊昔神人大射獵。巖上馬跡如レ蹈レ雪。末矢入レ石猶飲レ羽。到レ今突兀苔蘚聚。水涸火然大澤間。中有二神人來往路一。金童曉飛六月霜。木客晝嘯五里霧。飄風驟雨吹欲レ折。九百七十餘丈樹。須臾風罷雨亦晴。鶴鳴二萬壑一寒色生。靈池新吐寶珠氣。紫煙成レ花滿二太清一。笑我年年老二風塵一。塵中役々七尺身。何時一出飛鳥上。彩翠染レ我芙蓉巾。

阿蘇山　鐵軒　小早川秀雄

澄み渡る秋の空を東に眺め遣れば、濛々たる阿蘇の噴烟は、勢猛く天に冲りて、滿山の不平を世にも響けと吐きつゝあるが如し、聞け、彼の無言の叫びを、そも何事に向つて不平を吐かんとする。

一たび華嚴の瀧が、厭世青年の墓場となりてより、淺間の噴火口、又薄志弱行の徒の臭骸を埋め、遂には我阿蘇山も、痴漢の自殺所として、其靈境を汚がさるゝに至れり、阿蘇山たる者、如何んぞ濛々の黑烟に其不平を洩さゞるを得ん。

觀よ、阿蘇の秀嶺が、巍然として萬古に聳え、所謂壽安鎮國の名を得て、鎮西の群巒を俯瞰しつゝあるの雄姿の、如何に堂々たる者あるかを、又觀よ、旦暮に絕えざる山上の噴烟の、龍と躍り雲と捲き、時には石を飛ばし、砂を降らし

て、大地を震動せしむる威力の、如何に雄々しきかを、阿蘇は是れ活動の山にあらずや、阿蘇は是れ猛烈の神の化現にあらずや、自然は阿蘇を造りて、人間に猛かれ、勇ましかれと敎訓し、刺激する者にあらずや、阿蘇の雄姿を眺め阿蘇の威容に對しては、吾人の感想は此の如くならざる可らず。

斯かる勇ましき噴火口が、何故なれば薄志弱行なる厭世青年の墓場として適當なるぞ、活動を敎へ、奮鬪を敎へ、勤勉力行して人間の本能を盡せよと敎ふるが、阿蘇の精神ならずや、吾人は阿蘇に登り、阿蘇を望み常に爾かく感ずるなり、阿蘇が日夜吾人の爲めに慰藉となり、興奮となりて、四圍の眺めの中に、最も吾人の意に適せるは、是が爲めなり、嗚、薄志弱行の徒、何爲れぞ我阿蘇を誤り、阿蘇を穢し、不淨不潔の地たらしめんとするぞ、阿蘇の山靈、如何んぞ鬱勃の不平を吐かざるを得んや。

元來、厭世と謂ひ、自殺と謂ふ事が、吾人の活動主義、奮鬪主義よりして、最

も、馬鹿氣て、又た最もつまらなく感ずるなり、此世が何故に厭やなるか、不平もあらん、不如意もあらん、併もこは吾人の運命にあらずや、運命によりて生らされたる吾人は、畢竟運命の奴隷のみ、泣いたとて、藻掻いたとて致方は無きなり、唯奮鬪により、活動によりて、自力を以て運命に打ち勝ち、光明を招來するに勉むべきのみ、是れ唯一の賢き仕方也、吾人の心掛けは斯くの如くならざる可らず、自殺に至りては、愚の極のみ、痴の極のみ、是の如きは、活動的の阿蘇山が、全然排斥する處ならざる可らず山靈は必ず彼等の心得違ひを憐殺し恨殺し居らんか。

日夕阿蘇の噴煙を望見する人、宜く阿蘇の無言の敎訓を領取して誤らざるに勉めよ、阿蘇は吾人の爲めに盛んに活動せよ、勇ましく奮鬪せよ、吾が不斷の猛烈なる煙は、汝等の眠りを覺まし、怠りを鞭つが爲めなりと叫びつゝあるに注意せよ、阿蘇の叫びは吾人の耳に爾く響くなり、乃ち少く其意義を聞く、阿蘇

附錄—蘇山餘情

の山靈必ず吾人の言に首肯せん。

阿蘇山の地學的研究附錄 終

明治四十年十二月一日印刷
明治四十年十二月十日發行

阿蘇山の地學的研究
定價金八拾五錢

著者 岩崎重三
著者 角田政治
著者 有田保太郎
發行者 平山勝熊 東京市京橋區南鍋町一丁目二番地
印刷者 守岡功 東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發兌元 東京市京橋區南鍋町一丁目 株式會社 隆文館

著作權所有

株式會社國光社印刷

大日本地理集成

高等師範學校教授 矢津昌永先生
熊本縣師範學校教諭 角田政治先生
佐賀縣師範學校教諭 小平高明先生

合著

總洋布裝美本
紙數大約七百頁
定價金壹圓八拾五錢
小包料拾錢

本書の特色

一、材料は斬新に記述の體裁は論理的にしかも趣味多く、生ける地理學の眞相を發揮して餘すなきものなり。

二、內容の順序は國定の地理教科書に準據したれば、管に中學教員の參考たるのみならず、小學校教師座右の好指針たるべし。

三、地圖繪畫、説明圖を挿入すること數十葉、毎章末必ず研究上の注意事項を掲げて洩さざれば、以て文部省檢定受驗者必携の好參考書たるべし

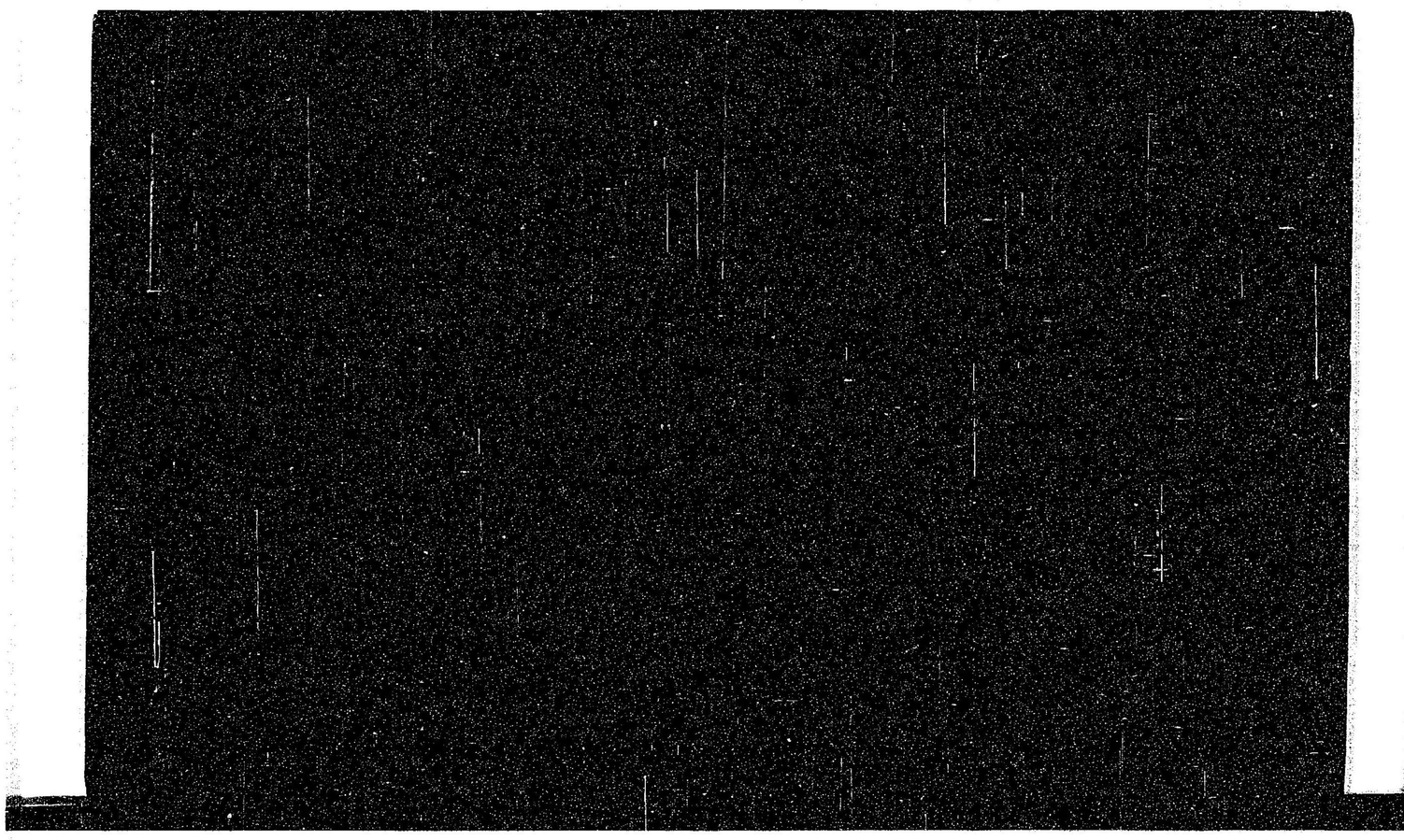
四、從來の地理書の弊は土地と人生との關係を明ならしめざるにあり、本書はつとめてこの點に意を注ぎて合理的の解釋を怠らず、都會生業交通につきては、その舞臺たる土地との間に因果の理法を求めその現狀を明にすると共に將來の如何を豫測し、これを外國の事例と比較して論述せしところ、眞に地理學の一新機軸を出せしもの。

五、現今の地方地理たる處誌には沿革の大要を加ふ、蓋、地理は現今の歴史なり、封建割據の後を受け各地異樣の習慣生業、特殊の風習あること知らざるべからず、況んや本邦沿革を明にせずして、何を以て之に通ずるを得んや

發兌元 東京市京橋區南鍋町一丁目 株式會社 隆文館
（振替貯金口座八五三番）

大正十四年九月廿四日
小牧實繁

東京 神田 一心堂書店



056316-000-1

453.8-I947a

阿蘇山の地学的研究

岩崎　重三／等著

M40

CAL-0001